

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：23401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660075

研究課題名(和文) 上の子を家族立ち会い出産に参加させた母親の体験と子どもへの影響 - 13年後の追跡 -

研究課題名(英文) Experience of mothers whose child participated in birth of his or her sibling and influence of attending birth on child : Follow-up Survey after 13 years

研究代表者

月僧 厚子 (GESSO, Atsuko)

福井県立大学・看護福祉学部・講師

研究者番号：00170720

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)： 母親は日常生活を通して出産への立ち会いに起因すると思われる子どもの言動を確認しており、当初3歳以上の場合現在も記憶が残っていると考えていた。全員が子どもと出産体験を共有できたことを肯定的に評価し、性に関する態度や、結婚・出産に際して話し合うための基盤になる体験だと表現し、家族の絆を強めたと表現した。

立ち会った子どもは、当初3歳以上の場合、出産前後の出来事を断片的に記憶していた。記憶は、赤ん坊の重さ、お臍の固さといった感覚や、嬉しかった、可愛がりたいと思ったといった情動を伴い表現された。全員が学校教育の中で関連する知識の習得と共に立ち会い体験を想起して知的な理解を深め、体験を再統合していた。

研究成果の概要(英文)： Mothers observed their children's speech and behavior daily and confirmed their positive bonding with their sibling. Their bonding was considered originated in the experience of attending birth. Mothers also confirmed that their children, who were 3 years old or older at the time of birth attendance (members), retained memory of the experience. All mothers valued the experience of birth with their children. They also expressed that the experience became a basis of discussion with their children regarding sex, marriage, and that the experience involving all family members strengthened family ties.

Members remembered happenings before and after the birth in fragments. Their memories were physical observations such as weight of a baby and hardness of the navel, and feelings such as joy and willingness of taking care of his/her sibling. Birth attendance experience deepened the member's intellectual understanding of events related to child birth integrated with sex education at school.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：家族立会出産 縦断的継続研究 母親 子ども 記憶 生活体験 家族関係

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

出産場面への子どもの参加に関する研究報告は世界的にみて少ないが、米国において参加観察 (Leonard, 1979)、母親へのインタビュー (Anderson, 1979)、参加した子どもへのインタビュー (Mehl, 1977; Anderson, 1983) 等の報告があり、これらの研究結果は出産への子どもの参加を概ね肯定的出来事ととらえている。これらの研究結果に基づき、世界保健機構は、明らかに有効で奨励されるべき産婦へのケアとして「産婦に付き添う人を、産婦の選択として尊重すること」の一項をあげた (WHO, 1996)。我が国においては、1900年代に入り、子どもを含めての家族立ち会い出産について、新聞紙上 (読売, 1992) や消費者団体の機関誌 (ぐるーぷ・きりん編, 1997) により紹介され始めたが、『子どもの出産への参加』をテーマとした研究は数が少なく (大久保 他, 2008、蔵本, 2008)、本研究者の知る範囲では、長期にわたる縦断的継続研究としては本研究者等の取り組みのみである。

(2) 著者によるこれまでの取り組みと、本研究の位置づけ

これまで、著者等は母親の出産場面に立ち会った子どもへの影響について明らかにすることを目的として、半構成的面接法を用いた帰納的記述的研究により関連要因を探り (月僧, 日本助産学会誌, 13(3), 90-91, 2000、月僧, 日本助産学会誌, 16(3), 88-89, 2003、月僧, 2003 ICN 学術集会、他)、そこで得た知見を質問紙調査により演繹的に検証するという試みをしてきた (月僧 我部山 清野 他, 第23回 ICN 4年毎大会, 2005、月僧 我部山 他, 母性衛生, 46(3), 106, 2005、月僧 伊藤 我部山, 日本助産学会誌, 21(3), 159, 2008 他)。本研究は、それらの一連の研究の延長線上に位置するものであり、長期にわたる縦断研究への取り組みの一部である。

また、半構成的面接法による研究は妊娠末期に始まり、産後3日目、産後1ヶ月までと、産後3年目までの追跡調査を行い、質問紙調査においては妊娠末期、産後3日目、産後1ヶ月、産後6ヶ月までの調査に取り組んできたが、これまでの取り組みは、立ち会った子どもの年齢が2~6歳と学歴期以前であったことから、いずれも主な情報提供者として母親に照準を合わせており、上の子を出産に参加させた母親の視座から子どもを含んだ立ち会い出産体験の構造とその意味、及びその後の上の子への影響を明らかにしようとすることに重点が置かれていた。

本研究における面接調査では、母親に加えて、出産に立ち会った子どもを主な情報提供者として重視して設定していることがあげられる。青年期に達し自我が確立しつつある子ども達は言葉による表現力も増し、出産に立ち会った体験とその影響について、母親とは異なる子ども自身の立場から発言することが可能な年齢に達しているものと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、第2子以降の出産に際して上の子どもを出産場面に参加させた母親の体験と、母親の出産場面に立ち会った子どもへの影響を明らかにすることを目的とした縦断的継続研究の一部である。

今回申請した研究期間における研究目的としては、出産への立ち会いから13年が経過し、立ち会った子どもが青年期に達した時点における、上の子どもを出産場面に参加させた母親の体験と出産に立ち会った子どもへの影響について、質的記述的研究により明らかにすることである。

母親と立ち会った子どもの双方の視座から、立ち会った子どもが青年期に達した時点における出産の記憶とそれに伴う思い、出産への立ち会いから今日に至る過程で遭遇した立ち会い体験に基づく出来事等が明らかになると考えた。さらに、立ち会わせた母親及び立ち

会った子ども自身の生活体験を根拠として、現時点における上の子を出産に参加させた母親にとっての意味、上の子にとっての出産に参加したことの意味が再評価されると考えた。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

半構成的面接による帰納的、記述的デザイン

(2) 研究対象

本研究の対象者は、13年前の妊娠末期の時点で、家族立ち会い出産に就学前の上の子を出産に参加させることを希望し家族として研究への協力を承諾したものであり、妊娠から出産までの全過程において母子共にローリスクであり、妊娠末期、産後3日目、産後1ヶ月、産後3年目に行った面接調査の全過程に参加できた母親9名とその家族のうち、家族として研究への協力を承諾したものである。13年前に母親の出産に立ち会った子どもの人数は13名である。当初の年齢は、2歳児4名、3歳児4名、4歳児3名、5歳児1名、6歳児1名であり、年齢幅は2才0ヶ月から6才5ヶ月であった。

本研究の対象となる母親には、継続的な研究協力への内諾を得ていたが、面接を実施する際には、その都度、母親及び研究への参加の意思のある子どもに対して、研究内容及び倫理的配慮について説明を行った上で、子どもとその両親から研究への協力の承諾を得ている。

(3) 研究場所

面接は研究対象者の自宅の個室、又は13年前の出産施設である助産院の一室を基本としたが、面接対象者から希望があった場合には、対象者が希望する落ち着いた話ができる場所を使用することとした。

(4) 研究期間

平成23年4月～平成26年6月現在

(5) データ収集及び分析方法

面接法を中心とするフィールド調査
本研究では、実際の場で研究対象の人々

に直接接して、その人々の視点から問題や状況を理解するフィールド調査の方法を採用した(Polit & Hungler, 1987/1994)。母親と子どもの体験を、対象者等自身の表現から捉えたいため、フィールドワークでは研究対象者との面接を中心とした。面接はSpradley(1979)による民族学的インタビューを参考に、公式的な半構成的面接法を用いた。面接内容は対象者の理解を得たうえでICレコーダーに収録し逐語的に記述して質的分析を行う。

分析方法

データの分析は、Spradley(1979)の手順を参考に行う。上の子を家族立ち会い出産に参加させた母親の体験と立ち会った上の子への影響について、構成要素を抽出し体験の構造を発見するため、文脈に沿ってデータの意味を明らかにしたうえでコード化し、さらに、意味の類似性に注目していただいた上位カテゴリーにまとめ上げていく。カテゴリー間の関係性を明瞭化して、対象者等の体験の全体像を明らかにし、体験の全体像に共通した主題を確定する。

信頼性と妥当性の確保

内容の妥当性を確保するために、ガイドラインの作成及び分析方法などに関して、質的研究の専門家から指導助言を得る。

研究方法の信頼性と妥当性を確保するため面接内容の分析にあたり複数回の面接内容を照合する、面接内容が不明確な場合には追加面接を行い確認するなどによりデータの信頼性を確保する。研究対象者に対して、研究者が行ったデータの解釈内容が妥当であるか否かを確認する。

倫理的配慮

対象となる家族には事前に研究の趣旨および研究の全過程について説明し、研究協力への同意を得る。その際、主な対象者として研究への協力を求める出産への立ち会いを経験した子ども達は、いずれも未成年

であることから、両親に対して家族として協力が得られることを確認する。

また、対象となる家族には、研究への参加の有無は、本人及び家族の自由意志によるものであり、研究対象者の申し出によりいつでも協力を中止することが可能であることを伝え、個人のプライバシーは保持されること、得られたデータは研究目的以外に使用せず、データ公表時には匿名を厳守することを伝える。

尚、本研究は福井県立大学研究等における人権擁護・倫理委員会による承認を得ている。

4. 研究成果

(1) 対象の概要

対象は上の子どもを家族立ち会い出産に参加させ、継続して研究対象となった母親と子どものうち本研究への協力を承諾したものであり、これまで母親6名と立ち会った子ども7名、及び当該出産において誕生した子ども2名の面接を実施した。母親の年齢は41歳から50歳で平均46.5歳であり、立ち会った子どもは17歳から20歳で平均18.7歳、誕生した子どもは15歳であった(最終面接時の年齢)。

(2) 面接により得られた内容

現在までの調査結果について概要を示す。母親から出産前後の記憶が断片的に表現され、内容は過去の面接時の表出内容と一致していた。母親はその後の生活を通して、立ち会い出産体験による影響と思われる子どもの言動を確認しており、立ち会い時の年齢が3歳以上の場合現在も記憶が残っていると考えていた。全員の母親が子どもとの間に出産にまつわる共通体験をもてたことを肯定的に評価しており、半数以上の母親が、将来子どもが結婚、出産する際に話し合うための基盤になる体験だと表現していた。また、母親は家族ぐるみの出産体験が家族の絆を強めたと表現しており、「家族は『運命共同体』と思え

る出来事」、「家族にとってのメンテナンスとなる体験」と表現するように、その後の生活過程において家族全体や自分自身を支える役割を果たしてきたと意味づけるものもいた。

立ち会った子どものうち立ち会った当初の年齢が3歳以上であったものは出産前後の出来事を断片的に記憶していた。子どもの記憶は、「赤ん坊を抱いた時の重さ」、「お臍の固さ」、「ぬるぬるした感じ」、「赤いきれいな色」といった物理的な身体感覚や、「嬉しかった」、「可愛がってやろうと思った」といったその時の感情や思いと共に想起され表現された。立ち会った子どもは全員、学校教育の中で関連する知識の習得と共に立ち会い体験を想起して知的な理解を深めており、立ち会い体験が再統合されていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 1件)

畑 真理依、月僧 厚子、母親の出産に立ち会った子どもの体験 - 学童期の場合 -、第53回日本母性衛生学会学術集会、2012年11月16日 - 17日、アクロス福岡

6. 研究組織

(1) 研究代表者

月僧 厚子 (GESSO, Atsuko)

福井県立大学・看護福祉学部看護学科・講師

研究者番号：00170720